

大学の
今がわかる
情報誌

2011.10
vol. 56

IKUEI NEWS

電通育英会

明日への視点

大学生研究フォーラム2011

現代大学生の学びとキャリアを
データと実践を架橋して理解する

大学を訪ねて

一橋大学



連載

アメリカン・キャンパス・ライフ / 楓 セビル

連載

先輩! こんにちは 鹿児島県薩摩川内市立平佐西小学校 教諭 / 小谷川 優さん



撮影：溝上 慎一

明日への視点

1 現代大学生の学びとキャリアをデータと実践を架橋して理解する

大学生研究フォーラム2011

1 大学生研究フォーラムのスケジュール

3 フォーラム開会によせて／登壇者のプロフィール

5 特別講演

「大学受験の今日的、社会的意義——大学に何を求めるか」 和田 秀樹

9 報告

9 報告1 「育てる教育力学と支援する教育力学の相補的關係」 溝上 慎一

11 報告2 「大卒者の初期キャリアと大学の学びを媒介するもの」 下村 英雄

13 コメント

〈労働経済学の視点から〉 浦坂 純子

〈高等教育全体の視点から〉 鳥居 朋子

〈大学生とキャリア形成の視点から〉 豊田 義博

15 パネルディスカッション

ファシリテーター 中原 淳

パネリスト 浦坂 純子／下村 英雄／豊田 義博／鳥居 朋子／溝上 慎一

18 ディスカッションを終えての小括

「『大学生調査と教育実践との関係』を振り返る」 中原 淳

19 総括パネルディスカッション「二日を振り返って」

司 会 大塚 雄作

パネリスト 川崎 友嗣／松下 佳代／吉見 俊哉

23 併催 高校教諭のためのシンポジウム

23 第1部 討議

パネリスト 浦坂 純子／中原 淳／溝上 慎一



25 第2部 高校現場からの報告

「緊急アピール」 佐藤 忠司

「生徒の成長の契機とキャリア教育のありがた」 三浦 隆志
「『考えること』と『感じること』」 被災地からのメッセージ」 村上 育朗

27 パネルディスカッション

「高校における学業・キャリア形成と大学への架橋」

司 会 大堀 精一

パネリスト 奥村 弘史／鈴木 徹也／三浦 隆志／村上 育朗／溝上 慎一

大学を訪ねて(第28回)

29 一橋大学

33 復興に向けてー被災地で活躍する学生ボランティア(第2回)

33 東北芸術工科大学・山形大学 「スマイルエンジン山形」

34 東北学院大学 「災害ボランティアアステーション」



連載

アメリカン・キャンパス・ライフ⑩ 楓 セビル

35 広告専門大学院VCUブランドセンターの善意「STILL for JAPAN」プロジェクト

連載

38 読んで良かった本の紹介(第4回)

〈知情意〉の調和を求めて

慶應義塾大学名誉教授 清水 猛

先輩！こんにちは

39 鹿児島県薩摩川内市立平佐西小学校教諭 小谷川 優さん

42 2011年大学院奨学生夏期セミナー

45 2011年大学給付奨学生セミナー

47 奨学生の集い・大学院奨学生冬期セミナーのお知らせ

48 IKUEI INFORMATION



ラム2011

於: 京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール

践を架橋して理解する

1日目 2011年8月1日(月)

大学生研究フォーラム2011



10:00~11:30

特別講演(5ページ)



11:45~13:00

昼食会

シンポジウム

「学生調査から実践に何を伝えるのか」
意識調査2010』※の結果をふまえて

13:15~14:15

報告(9ページ)



14:15~15:00

報告へのコメント(13ページ)



15:20~15:45

参加者ダイアローグ



明日への視点

大学生研究フォー

現代大学生の学びとキャリアをデータと実

2日目 2011年8月2日(火)

併催

高校教諭のためのシンポジウム

第1部

10:00~12:00

討議 (23ページ)

12:00~13:30

ランチタイム・ミーティング



第2部

13:30~17:00

高校現場からの報告 (25ページ)

パネルディスカッション (27ページ)

「結局私たちは、大
—『大学生のキャリア

15:45~16:25

パネルディスカッション(15ページ)

16:25~16:35

小括(18ページ)



※「大学生のキャリア意識調査」 について

2007年より、京都大学高等教育研究開発推進センターと公益財団法人電通育英会が共同で実施している全国調査。大学生の学生生活の実態及びキャリアへの意識を把握することを目的として、全国の大学1年生と3年生を対象に3年に1度実施している。調査内容・結果は電通育英会のホームページ掲載の「大学生のキャリア意識調査」<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/>を参照。

16:45~17:25

総括パネルディスカッション
(19ページ)



開会によせて



京都大学 高等教育研究開発推進センター
センター長

田中 每実

「大学生研究フォーラム2011」は400名以上の参加者を集め、盛会のうちに終了しました。

今年度からは、京都大学と電通育英会に加えて、東京大学 大学総合教育研究センターが共催に加わりました。電通育英会の仲立ちにより、この領域で最高位にある専門組織の実質的な連携が実現いたしました。

フォーラム翌日には、株式会社学研教育みらいの協力による「高校教諭のためのシンポジウム」が開催され、200名以上の参加がありました。大学教育を外部から相対化し、根底からの見直しをはかる強靱な集団が、大学生研究の戦列に加わったこととなります。これは高大連携という常套のスローガンの、たぐいまれな実質化です。

今年度のフォーラムには体調の不備で参加できず、病床で充実したメニューを見て、参加者たちがうらやましくなりません。この豊かな会合が今後ますます発展することを願ってやみません。



東京大学 大学総合教育研究センター
センター長/副学長

吉見 俊哉

この度は、京都大学と電通育英会の盛大かつ意義のあるフォーラムの共催に加えていた

だき大変嬉しく思います。今、大学はますます教育の質を問われる時代を迎えています。今後、それに応えうる学生を充分に育てていくためには、各大学が学部・研究科の壁を超えて全学的な教育改革への取り組みを

大学生研究フォーラム 2011 1日目 登壇者のプロフィール



溝上 慎一 (みぞかみ しんいち) 氏
京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授
1996年より京都大学高等教育研究開発推進センター助手、2003年より現職。自己形成論、青年心理学、学生の学びと成長を中心としたFDと大学生研究を行っている。著書に「現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ」(有斐閣選書 2010)、「自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる」(世界思想社2008)など。



下村 英雄 (しもむら ひでお) 氏
独立行政法人 労働政策研究・研修機構 主任研究員
筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。博士(心理学)。心理学の見地からキャリア教育をはじめ、キャリアガイダンスのあり方や、若者の進路選択・就労意識に関わる研究を行っている。



和田 秀樹 (わだ ひでき) 氏
国際医療福祉大学大学院 教授/精神科医
1985年東京大学医学部卒業。東京大学医学部付属病院精神神経科助手、アメリカ・カール・メニング精神医学学校国際フェローを経て現職。専門は老年精神医学、精神分析学、集団精神療法学。心理学や教育問題のほか、受験に関する著書多数。映画監督、評論家としても活躍している。



豊田 義博 (とよだ よしひろ) 氏
株式会社 リクルート ワークス研究所 主幹研究員
東京大学理学部卒。リクルート入社後、新卒採用戦略、広報計画業務を経て、就職情報誌『就職ジャーナル』『リクルートブック』『Works』の編集長を歴任。現在は研究員として、組織・人材マネジメント、労働市場の未来形などを探索している。



中原 淳 (なかはら じゅん) 氏
東京大学 大学総合教育研究センター 准教授
東京大学大学院学際情報学府 准教授(兼任)。東京大学卒。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。博士(人間科学)。文部科学省メディア教育開発センター(現・放送大学)助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員等を経て2006年より現職。「大人の学びを科学する」をテーマに、企業・組織における人々の学習・コミュニケーション・リーダーシップについて研究している。

考えねばなりません。それなくして未来は開けないと私は思っています。本日のフォーラムの課題にも掲げられているように、今後は10代半ばから20代にかけての若年層の育成を設計する上で、初等・中等教育から社会への連続性を備えた教育のあり方を考えていく必要があります。私も一人一人の力は小さなものですが、京都大学・電通育英会と協力・連携させていただきながら、これらの目標に向かって努力していきたいと思っています。今後このような試みが発展し、大きな成果を生み出していくことを期待しています。



公益財団法人 電通育英会
理事長
松本 宏

電通育英会では、高い向学心を持ちながらも諸事情により就学が困難な学生への経済的支援を行っています。今年度4月より公益財団法人の認可を受け、看板が変わったところで新たな気概を持って取り組んでいきたいと思っています。当財団ではもう一つの事業として次世代を担う人材育成にも力を入れていきます。特に来年度からは、学生を対象とした人材育成活動に対する助成支援を推進していきます。これらの事業の一環としても「大学生研究フォーラム」を京都大学と共催させていただきました。4年目を迎える今年、新たに東京大学との共催が実現いたしました。このフォーラムを開催できることは私どもの誇りの一つです。何より、ご参加いただいている皆さまの協力を支えられてこのような素晴らしいフォーラムを作りあげられるということを実感し、深く感謝申し上げます。今後ともぜひご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



松下 佳代 (まつした かよ) 氏
京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(教育学)。京都大学教育学部助手、群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育教授システム開発センター助教授を経て、2004年より現職。



浦坂 純子 (うらさか じゅんこ) 氏
同志社大学 社会学部 教授

大阪生まれ。1996年大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程修了。博士(経済学)。松山大学経済学部、同志社大学大学院文学研究科助教授を経て、2011年より現職。著書に「なぜ「大学は出ておきなさい」と言われるのか—キャリアにつながる学び方—」(ちくまプリマー新書 2009)。



川崎 友嗣 (かわさき ともつく) 氏
関西大学 社会学部 教授 キャリアデザイン担当主事

早稲田大学大学院文学研究科修了。日本労働研究機構研究員を経て、1997年関西大学社会学部助教授、2003年より現職。専門は職業心理学、キャリア心理学。近年は特に若年者のキャリア自立に関する研究を行っている。



鳥居 朋子 (とりい ともこ) 氏
立命館大学 教育開発推進機構 教授

名古屋大学大学院教育学研究科博士前期課程修了。博士(教育学)。アメリカ・ハーバード大学客員研究員、ミシガン大学高等・ポストセカンダリー教育研究センター客員研究員、名古屋大学高等教育研究センター助教授を経て、2009年から現職。高等教育マネジメントの視点から、カリキュラム開発やIRに関する研究を行っている。



大塚 雄作 (おおつか ゆうさく) 氏
京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

東京大学理学部、教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。1996年放送教育開発センター教授、2000年大学評価・学位授与機構教授を経て、2004年より現職。



吉見 俊哉 (よしみ しゅんや) 氏
東京大学 大学総合教育研究センター センター長/副学長

東京大学教養学部卒。2004年同大学院情報学環教授。2006年同学環長。2010年センター長、教育企画室長。2011年副学長。専攻は社会学、メディア論、文化研究。著書に「大学とは何か」(岩波新書 2011)、「メディア文化論—メディアを学ぶ人のための15話」(有斐閣アルマ 2004) など。

大学受験の今日的、社会的意義 大学に何を求めるか

国際医療福祉大学大学院 教授／精神科医 和田 秀樹



21世紀は知識の時代

私は大学院で臨床心理学を教えています
が、1987年に『受験は要領』という本を
出版して以来、長い間受験勉強の分野にも
関わってきました。

本日の講演では、大学受験の意義を論じる
上で、まず現代社会が「知識社会」である
ということ的前提を考えていきたいと思
います。

「知識社会」という言葉は1960年代に
P・F・ドラッカーが使用したのが最初だと
言われています。当時のドラッカーの主張は、
「機械の進歩よりも、それを使う人間がど
れだけ優秀かで社会が決まっていく」とい
うものです。その後、30余年を経て1999年
に、ケルンのサミットで知識社会の到来が提
唱されたのを機に、国際的な用語として認
知されるようになりました。実際に21世紀
を迎えた現在、私はますます知識の必要性
が高まっていると感じています。

現在のような高度情報化社会では、分
からないことがあればネットやスマートフォン
を使つていつでも調べることができます。従つて、
敢えて知識を得る必要はないと考える人が
いても不思議ではありません。しかし、たと
え膨大な情報を簡単に入手できたとしても、
それらを使いこなすための知識がなければ



意味がありません。例えば、ネットで医学論文を読むことができて、医学知識がなければ無用の長物です。これはつまり、いつでも情報を入手できる時代の方が、より知識量を問われるということを意味しています。

このような高度情報化社会、IT社会を生き抜くことができる職種として考えられるのが、知識労働者と呼ばれる人たちです。例えばビル・ゲイツやマイクロソフトの笠原社長など、現在の資本家は知識という生産手段を通じて、ごく短期間で大金持ちになっています。それ以外の職種としては医師などの資格を持った知識専門職、あるいは接客業などのサービス労働者など、いわば機械に代えられない知識や技能を要する職種が考えられます。

下がり続ける日本人の学力

このように、知識の必要性が高まっているにも関わらず、あらゆる年代層において日本人の学力低下が問題視されています。大学生の学力低下に加えて、PISA調査などの国際学力テストにおいても日本人の成績は

下降する一方で、また、各種英語試験ではすべての能力において、調査したアジア諸国中最低レベルを示しています。英語力の欠落は、今後学問をやる上でも、ネット化社会に対応する上でも大変不利です。

このような事態を招いた原因の一つは、ゆとり教育の導入です。子どもたちに教えるべき内容は増えているにも関わらず、初等・中等教育の現場では授業時間が減少しています。そのため学校教育しか受けられない子どもは、明らかに不利な状況に置かれています。昔であれば貧しい家の子どもほど上昇志向が強く、一生懸命勉強したものです。現在では塾に行くことができる裕福な家庭の子どもの方が勉強しているとい



う状況になっています。

また、少子化によって公立高校や私立大学の多くが定員割れとなっていることで、かなり低学力の子どもでも進学できます。このように様々な形で受験圧力が緩和されたことによって、学力の低い子どもがますます勉強に対する努力を怠るようになる悪循環が生まれます。しかしながら、実際の日本の社会構造に鑑みれば、正社員とフ

リーターの年収の格差は相変わらず大きく、表面的には年功序列の賃金体系が崩れたとはいえ、依然として40～50代の賃金体系は分厚いままです。医療費・教育費などが年齢を重ねることにかさんでいく日本社会の仕組みや、それに伴う賃金体系を考慮すれば、教育する側には子どもたちをきちんとした会社に、正社員として就職できるレベルに育てねばならないという責務が生じます。表面的に平等社会と言われていても、現

実はこのような競争社会になっている今の日本で、子どもに競争をするなどというのは、子どものためになっていないと思います。特に親の収入で子どもの教育機会が左右され、結果として将来が決まってしまうような格差社会の固定化は、何としても避けなければなりません。

一方で、こうした格差・競争時代をチャンスとして捉えなおすことも可能です。というのも昔と比較して、

現在ほどの業界であろうと、学歴と収入の相関関係が昔と比べて非常に高くなっていますし、資格を持っている人間が生き延びやすい社会になっているからです。その意味でも、やはりきちんと競争を経た学歴社会、知識社会に対応することは大切だと言えます。

知識社会に求められる頭の良さとは

では、このような21世紀の知識社会を生き抜くために必要な能力とはどのようなものでしょうか。その一つとして考えられるのが問題解決能力です。そこで重要になってくるのは、あらゆる知識を活用して答えを導き出す「推論」という過程です。

人間は感情によって思考や推論が左右さ



れることがあります。そのため、予め自分の思考や推論、そして知識状態をきちんと理解しておかないと、誤った問題解決をしてしまう可能性があります。この自己に対するモニタリング作業をメタ認知と呼びます。社会ではこれらの作業を通じて、自己を知り、それに応じた自己改造を図ることが大切です。

問題解決を行う上では、自分の知識だけではなく他人の知識を使うことも有効です。自分にとっては難しい問題でも、他人にとっては簡単に解決できる問題、ということもあるからです。その点で、私は他人の知識を上手く活用できる能力として、人間関係の構築も頭の良さを規定する要因の一つとして考えられています。メタ認知活動に関しても、たとえ自分でメタ認知ができなくても、他人からの

評価を参考にして自己のあり方を見つめ直すことも可能です。逆に、例えば友人から「お前の推論は感情によってかなり流されやすいから気をつけるよ」と言われても、「そうなんだ、昔から俺ってお天気屋でさあ」などと言って全然変えようとしなければ、いくら自分を理解していてもメタ認知活動ができないことになります。

このような感情処理能力として重要視されているのがEQ(=Emotional Quotient)です。これは自己や他者の感情を知ってそれをコントロールできる能力を指しています。例えば、うまく人間関係に対処する能力や、自分を動機づけて行動する能力がそれにあたります。

以上のすべての条件に適う人材を目指す、あるいは育成するのはとても無理だと思うかもしれませんが、しかし努力目標として切り捨てる必要はありません。教育というものは基本的に欲張りであつていいと思います。実際に、私自身は今後問題解決能力以上に問題発見能力が必要とされるのではないかと予想しています。知識社会ということと考慮すれば、現在の自分が持っている知識量に慢心せず、常に学ぼうとする知的好奇心は不可欠です。さらに現在は答えのない時代ですから、常に新たな問題を発見しようとする



視点はもちろん、それに対して色々な仮説を立てて根気よく推論と試行を繰り返す知的体力が求められるのではないのでしょうか。

受験勉強は本当に役に立つのか

以上に挙げたような能力を身につけた

めに、今後我々はどうのような教育を推進していくべきなのでしょう。知識を身につけたという意味では、詰め込み教育といわれた日本の初等・中等教育は悪くなかったのではないかと思えます。基本的に知識が多いほど推論の幅は広くなりますし、そもそも日本の初等・中等教育は諸外国の教育モデルとして活用された実績もあります。つまり知識を詰め込むこと自体は悪いことではなく、問題はいかに高等教育の段階で、初等・中等教育で詰め込んだ知識を活用する力を育てるか、ということにあると思います。大学受験がひと通りの知識を身につける教育であるならば、大学ではこれまでに身につけた知識を使ったり、その知識そのものを疑ったりする教育が必要です。

その意味でも受験勉強の過程で、知識を試験に合う形でアウトプットする訓練を行うことは重要です。私が受験勉強に関して認派であるのは、受験勉強が単に知識を身につけるだけではなく、様々な能力を育てるトレーニングになるからです。

記憶力や英文処理能力を鍛えるのはもちろんですが、例えば数学に関しては、沢山の公式やそれ以上に解法の知識を応用して答えを導き出す過程を繰り返すことが推論のトレーニングにもなります。現在の子ど

もたちに欠落している忍耐力を鍛える上でも効果的だと思います。

また、今は受験勉強の方法論を書いた本も出版されていますので、それらを利用して受験勉強そのもののやり方を見直すことも有効だと思います。というのも、勉強がうまくいかないときに方法を変えて成功する経験があれば、その後も何かの壁にぶつかったときに自分の能力のせいにするのではなく、やり方を検討するという視点を見出すことができるところです。

ただし、受験勉強を考える上で誤解してはならないのは、東大や京大に入ったらそこがゴールだという考え方です。それよりも、受験勉強を通じて沢山の知識や能力を身につけたことや、推論のトレーニングを繰り返した経験を自信に、その後さらなる能力を伸ばしていくことが大切だと考えています。実際に受験勉強で訓練を重ねた経験は大学入学後だけではなく、社会に出た時にかなり有用になってきます。たとえ受験に失敗したとしても、知識が重要視される時代では、社会に出てからの努力次第で逆転できる可能性もあるわけです。これらの可能性をふまえて、受験勉強の経験を社会での新たな学びに結びつけられるような教育を実現していくべきではないのでしょうか。

報告 1

溝上・下村両氏からの報告では、議論の出発点として、現代の大学生の実態を
 『大学生のキャリア意識調査2010』の結果に基づいて分析した、興味深い論点が示されました。



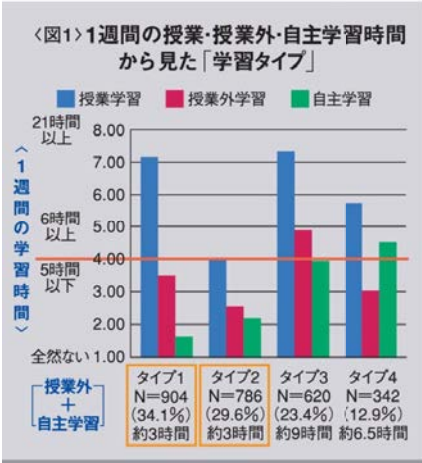
育てる教育力学と支援する 教育力学の相補的關係

京都大学 准教授
 溝上 慎一
 高等教育研究開発推進センター

現代大学生の6割が 授業外学習をほとんどしていない

本日は「大学生のキャリア意識調査2010」を基に、現在の大学生の学習および生活状況について考察した結果を、学生の学びと成長というテーマに即してご報告します。

最初に現在の大学生の学習状況



を分析した「学習タイプ」を見ていきます。(図1)のグラフは学生の1週間の学習時間を「授業学習」、課題レポートや予習復習など、授業に関わる「授業外学習」、授業とは関係のない「自主学習」という3つの項目で調査し、学生の総合的な学習状況を次の4つのタイプに類型化したものです。

- 〈学習タイプ1〉
 授業外学習、自主学習の時間が少ない
- 〈学習タイプ2〉
 授業にも出ず、自分でも学習しない
- 〈学習タイプ3〉
 授業、授業外学習、自主学習すべて長い
- 〈学習タイプ4〉
 授業外学習は短い自主学習時間が長い

このうち、全体の約6割を学習タイプ1と2の学生群が占めています。これは現在の大学生の半数以上がほ

とんど授業外・自主学習をしていないということですが。

不適応的な日常生活を過ごす 6割の大学生

次に学生の1週間の過ごし方を類型化した「学生タイプ」(図2)を見ていきます。日常における学生の活動状況を調査し、その内容によって「自主学習・読書」、「インターネット・ゲーム・マンガ」、「友人・クラブサークル」の3つの指標に分類しています。4つの類型の特徴は次の通りです。

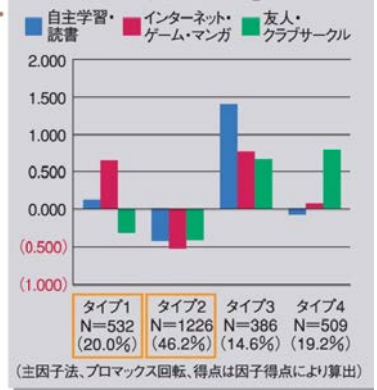
- 〈学生タイプ1〉
 交友関係に乏しく、多くの時間を1人で過ごす
- 〈学生タイプ2〉
 活動状況不明
- 〈学生タイプ3〉
 良く学び、良く遊び、活動性が非常に高い

〈学生タイプ4〉
 多くの時間を友人との交際や活動に費やしている

このうち、全体の6割以上を占めているのが学生タイプ1と2の学生群です。タイプ1は、「友人・クラブサークル」といった対人関係における指標が低く、これは一人で学習に取り組んでいる場合もありますが、対人関係が苦手な引きこもってしまうケースなども考えられます。タイプ2の学生群はすべての項目において低い指標を示しており、何をやっているのか活動状況が全く見えません。彼らは日常生活における充実感も低く、いわば大学生活に「不適応」な学生群とみなされます。

一方、学生タイプ3と4の学生群はキャンパスライフが非常に充実しています。対人関係が充実しているという点で

〈図2〉1週間の生活から見た「学生タイプ」



2つの学生群は表面的には変わりません。しかしながら将来のビジョンをしっかりと描き、それに向けて普段から色々な活動に取り組む学生や、社会人基礎力等が身につけていると自覚している学生はタイプ3に多いのです。

学力はキャンパスライフの充実度に影響する

これらの学生タイプは偏差値とも高い関連があります。偏差値65以上の大学では、タイプ3と4が占める割合が非常に高く、対照的に偏差値49以下の大学ではタイプ1と2が占める割合が高いという結果が出ています。もちろん試験で高得点がとれるだけでは、このような結果には至りません。学力を身につける過程というのは、考える力や忍耐力といった様々な能力を伸ばすトレーニングでもあります。ですから、このような学習に対する姿勢が日常生活の過ごし方に反映された結果であると考えています。

実際に学生タイプを、冒頭で説明した学習タイプの指標に沿って分析すると、学生タイプ3の学生は授業外学習、自主学習ともに取り組んでいる割合が高いという結果が出ています。問題は不適応とされた学生タイプ2です。授業外学習、自主学習いずれの学習時間も短く、現代の大学生に突出して多い学生タイプであることが分かっています。

このような学生の増加に鑑み、現在多くの大学がユニークな授業やプロジェクト科目を提供するなど、カリキュラムの改革に取り組んでいます。しかしこれらのプログラムに参加するのはもともと学習・課外活動ともに活発に取り組む学生であって、本来のターゲットとされる不適応の学生は、なかなかその段階まで到達しないというのが実際のところ。このような不適応の学生に対して、今後大学関係者は課外活動や対人関係をも考慮した包括的な支援を行っていくべきではないでしょうか。一方でキャンパスライフの充実している学生にもアクティブラーニング型授業への参加や自主学習を促し、より一層成長する機会を与えるべきだと考えます。

キャリア教育は早いほど良い

キャリアについて考える際、私は将来

(future life)と日常生活(daily life)という2つのライフを組み込んで調査・考察を行っています。将来の見通しを考えることはもちろん大切ですが、より重要なのは将来を見据えた日々の努力の積み重ねです。これを私は「将来と日常の接続」と呼んでいます。この2つのライフに対する学生の意識について、将来のためにすべきことを「理解」し、それを現在「実行」しているか否か、という観点から調査しました。そしてその結果を次の4つの学生群に分けました。

〈理解実行群〉
将来の見通しがあり、何をすべきか理解して実行している

〈理解不実行群〉
将来の見通しがあり、何をすべきか理解しながらも実行していない

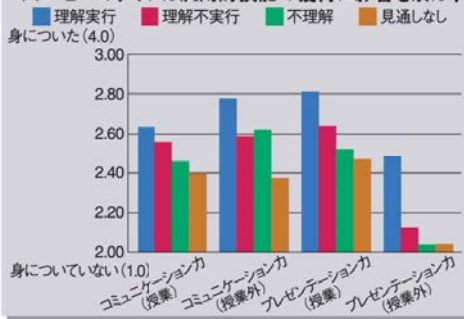
〈不理解群〉
将来の見通しはあるが、何をすべきかわからない

〈見通しなし〉
まだ将来を考えていない

理解実行群の学生は学習意欲も高く(図3)のグラフではコミュニケーション力・プレゼンテーション力ともに高い得点を示しています。この結果から、将来に動機づけられ日々目的意識をもって過ごす中で、汎用的能力を身につけていく様子が伺えます。ただし、彼らは大学に入ってから将来を考え、突然実行力を発揮するわけではありません。理解実行群の学生

はその多くが高校1、2年生くらいまでに将来を考えていることも、今回の調査で明らかになりました。逆に、1年生の時に見通しなしの学生は4年生になっても見通しなしのままです。従来、大学初年次からのキャリア教育は「早すぎる」と言われてきました。しかしながら今回の調査結果を考慮すれば、程度の差こそあれ、できるだけ早い段階で将来のことを考え、日常生活に欠かせない姿勢が求められるべきではないでしょうか。いつも将来のことを考えるというわけではありません。しかし、そういった姿勢を促す教育支援を大学教育の関係者は考えていくべきだと思います。

〈図3〉2つのライフは汎用的技能の獲得に影響を及ぼす



*本報告における図はすべて「大学生のキャリア意識調査」を基に溝上氏が作成したものを編集部が改編



大卒者の初期キャリアと大学の学びを媒介するもの

独立行政法人 労働政策研究・研修機構キャリアガイダンス部門
主任研究員
下村 英雄

対人志向の高い学生は年収も高い

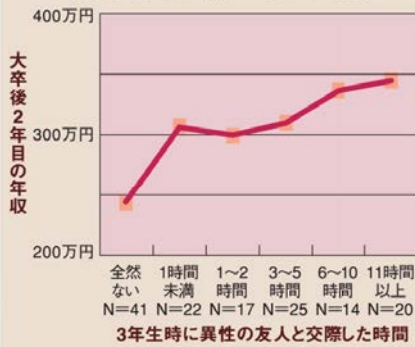
本日の報告では、京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会が共同で行った『大学生のキャリア意識調査』の追跡調査の結果をご説明します。これは第1回調査(2007年)を実施した当時3年生だった学生が、就職活動を経て、入職後2年目を迎える第2回調査時(2010年)までにどのような職業生活を送っているのか、その経過を調査したものです。その際、大卒後2年目程度までを初期キャリアと定義し、この初期キャリアにおける職業生活に影響を与えるものは何かということについてご説明します。

本報告での問題意識は次の3点で

す。まず大学時代における対人志向と勉学志向が初期キャリアに与える影響。次に大学生が身につけるのに望ましい対人志向・勉学志向についての考察。最後に日本におけるキャリアと学びの結節点についてです。

まず、今回の『大学生のキャリア意識調査2010』では、学生時代に異性の友人との交際、クラブサークル活動、コンパや懇親会に時間を費やした学生ほど、大卒後2年目の年収が高いという結果が明らかになりました(図1)。言い換えれば大学時代に対人志向が高かった学生は大卒後2年目の収入が高いということになります。2007年の調査でも、対人志向が高い学生は第一志望の企業に就職した割合が高く、大企業に勤務している割合も高いという結果が出ています(図2)。

〈図1〉大学3年生時に異性の友人と交際した時間と大卒後2年目の年収との関係



〈図2〉大学生の就職活動における対人志向・勉学志向の影響

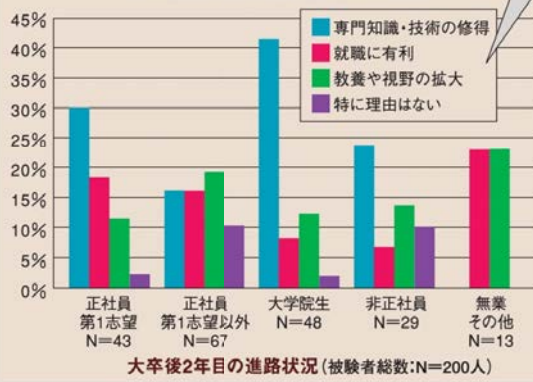
		対人志向	
		高い	低い
勉学志向	高い	第一志望内定	試験
	低い	第一志望以外に内定	未内定・就職活動行わず

他者ありきのキャリア理論

対人志向の高さは入職後の職業生活にも好影響を与えます。入職後の新入社員には職場に馴染むまでのプロセスが不可避に伴いますが、この点に関しても対人志向の高い

なぜこのような結果が出たのでしょうか。具体的な理由として、対人志向の高い学生は自己や外見に対する自信、ひいてはコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力への自信も兼ね備えているために、就職活動で評価されやすいということが挙げられます。

〈図3〉大学進学理由(大学3年生時に回答)と
大卒後2年目の進路状況との関係



学生はうまくこなせる傾向にあります。例えば入職時における有名な概念として、リアリティショックというものが知られています。これはやる気の有無に関わらず、新入社員が職場の現実を目の当たりにして不適応を起こす現象を指し、若者の離職の主な原因にもなっています。新入社員の多くは職場に馴染むまでにリアリティショックを感じたり、気分の落ち込みを経験するものです。一方で対人志向の高い学生はもともと職場に馴染みやすいだけではなく、他者からの支援も受けやすい傾向にあるため、たとえリアリティショックを感じたとしても乗り越えやすいのだ

と思います。対人志向の高い学生が高年取を得ている理由は、これら二連のプロセスにあると考えられます。こうした対人志向の高さがキャリアに好影響をもたらしていることからも分かるように、現在のキャリア理論の主流は「他者」を重視する傾向にあります。他者との関わりの中でのみキャリアは表現され、評価されます。異性との交際時間が長いと収入も高い、という結果は冗談のように思われるかもしれませんが、キャリアが本質的に他者論的、関係論的、対人的なものであるならば、ある意味でキャリアの本質を鋭く射抜いた結果であるとも言えます。

勉学志向の学生はなぜ就職を回避するのか

では、勉学志向の高い学生についてはどうでしょうか。民間企業に就職した学生だけを見た場合、正社員として第1志望の企業に入職した学生は勉学志向も比較的高いという結果が出ています(図3)。さらに大学時代に真面目に専門分野の勉強に取り組んでいた学生ほど専門的・技術的職業に就いている割合も高く、それだけに知識や技術を活かせることや、人に貢献できる現在の仕事

に誇りを感じているようです。

しかしながら、基本的に勉学志向の高い学生は、大卒後2年目の時点で大学院に在籍している割合が高い傾向にあります。彼らはなぜ就職を回避して大学院への進学や各種試験を選択するのでしょうか。この事実から、日本の就職活動あるいは民間企業の仕組みの中に、勉学志向の学生を取りこぼすことにつながる何らかの障壁が存在すると考えられないでしょうか。

「対人志向」「勉学志向」を改めて考える

対人志向・勉学志向がともに高い学生ほど第1志望の企業に内定する割合が高く、入職後の充実感も得られやすいという調査結果を考慮すれば、キャリアを考える上では双方の良い部分をバランスよく身につける方法が理想的であることは間違いありません。しかしながら、学生を育てる側としてはもう一つの方向性として、個人の特性に寄り添って、その能力を活かしていく環境づくりを考える余地があるのではないのでしょうか。例えば、対人志向の低い学生が入職後に職場に馴染めない原因の一つとして、いわゆる「空気を読む」とい

うような曖昧なコミュニケーションが成り立つてしまっていることが考えられます。企業の側でコミュニケーションの方法を、よりフォーマルでルールに則したものにすることができれば、対人志向が低い新入社員も職場に馴染みやすく、彼/彼女が本来持っている能力を活かしてあげられる可能性が高まります。

また、勉学志向の高い学生の中には、大学での研究にのみ興味を持って大学院に進学する学生もいます。このような学生に対して、大学は対人意識を伸ばすことを考慮しても、つと他者に開かれた開放的なアカデミズムのあり方を考えていくべきです。実際に調査結果でも大学の正課の授業できちんと情報の管理能力、プレゼンテーション能力、他者との協調性などの対人的能力を身につけた学生は自尊心も高く、結果として年取も高いというデータが出ています。勉学志向の学生だけではなく、対人志向の学生により専門的な視点を身につけさせるためにも、正課の授業をもっと重視していくべきだと思えます。

*本報告における図はすべて、大学生のキャリア意識調査「第1回調査時(2007年)に3年生だった学生を、第2回調査時(2010年)まで追跡調査した結果を基に下村氏が作成したものを編集部が改編

ら

労働経済学の視点から

コメント

ここでは3つの異なる専門的見地から、
溝上・下村両氏の報告に対する「問いかけ」としてコメントが寄せられました。

労働経済学の立場として、特に教育と所得の関係への関心を軸にコメントします。教育は後のキャリアにどのような影響を及ぼすのか、この点について溝上先生は2つのライフへの意識が高い学生ほど学習意欲があり、就職活動も第一志望に内定を得る割合が高いという興味深い分析をされています。

一方で、不適応・不活性な学生群における教育効果については、あまり触れられていなかったように思います。溝上先生のご指摘通り、確かにそのような学生群は、アクティブラーニングなどの実践型科目を

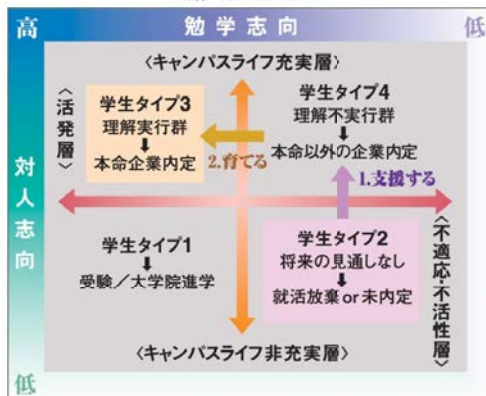


同志社大学 社会学部
教授
浦坂 純子

現在、高等教育の現場では質保証という課題のもと、学生の学習成果を社会に示さねばならない責務に追われています。多くの大学がこの課題に
応えるべく、カリキュラムマップやシラバスの作成に必死に取り組んでいます。ただしこれらの改革に着手する以前に、各大学は自分の大学が社会に

履修しない傾向にあります。しかしながら、それらを必修科目として組み込むなど、学生を積極的に導くことによつて、学習タイプ・学生タイプや2つのライフへの意識、結果として後のキャリアにも変化が生まれる可能性があるのではないのでしょうか。こうした学生への対応について、両報告における学生の志向やタイプを基に考えてみたいと思います(下図参照)。

溝上報告・下村報告から見てくる現代大学生像と
支援・育成の方法



*浦坂氏が作成した図を基に編集部が改編

し、次に左上の層―対人志向・勉学志向共に高く、学生タイプ3に当てはまる学生―に育て上げるステップを踏むことが有効なのではないかと考えます。下村さんの報告に関しては、対人志向の高い学生の方が入社後2年目の年収が高いという結果そのものには納得しています。ですが、これは入社後1年半を経過した時点で調査された年収なので、実際には初任給にあたります。よつて「働きぶり」が年収に反映されるという段階には至っておらず、あくまでも就職活動の成否という雇用の入口での状況を、年収を通して見ているのではないかと感じています。ただし、今後長期的な追跡調査が実現するのであれば、この対人志向・勉学志向がキャリアにどのような影響を及ぼすのかという分析は、労働経済学の分野にとつても教育と所得の関係を把握する上で、非常に意義のあるものになるのではないのでしょうか。

けではなく、彼らの学びの成果をいかに社会に還元していくかということを視野に入れて、改めて学びのあり方を考えていくべきです。例えば多くの大学が導入を進めているアクティブラーニングに関しても、単にグループワークやプレゼンテーションを授業に導入したのでは意味がなく、教員側がき

把握できますし、ローカルな調査ゆえに大学の特性に応じたカリキュラムや授業の再設計に利用することも可能です。とはいえ学生の実態は学生調査に基づく統計データだけでは把握しきれません。大切なのは教職員が学生と接する中で「皮膚感覚」で捉えた

大学生とキャリア形成の視点から



株式会社 リクルートワークス研究所
主幹研究員

豊田 義博

両報告における分析では対人志向・勉学志向にも高い学生や、将来の見通しを持って日々努力している学生が、第二志望の企業に内定する割合が高いという結果が示されました。ところが、高偏差値大学の出身で、活発な学生生活を経て就職活動にも真面目に取り組む学生の中にも、入社後に不適応を起こすタイプが少なくありません。

入社後に全く戦力にならないと評価される若手

社員は、実は自己への有能感が強く、「自分は仕事ができるはずだ」というスター願望を持っています。そのため「頑張っているのに自分の能力が活かせないのは環境が悪い」と考える他罰的な意識が強い傾向にあります。また、就職活動で内定を得るために形成した虚構の自己像にとられ続けて迷走してしまいうケースも見受けられます。

実際に不適応・適応を分ける要因を調査したところ、新しい環境に上手く適応していた学生は、就職活動時に職場の状況、雰囲気、従業員の気質・特性などの環境視点に関心を持っていました。また、彼らは学生時代に異なる価値観を持った人々と交流し、何度もPDSサイクル*を回す経験をしています。そして挫折や葛藤を繰り返すうちに、自分自身の志向や適性を知り、自分が将来輝ける場所を知覚するのだと思います。

対照的に入社後に不適応を起こす学生ほど、

高等教育全体の視点から



立命館大学 教育開発推進機構
教授

鳥居 朋子

おける「公益」として人材育成の役割を果たせているのか、という点を改めて問い直すべきではないでしょうか。つまり学生一人一人のキャリア形成だ

ちんと学習目標を掲げた上で学習活動を設計し、周到な授業計画を行うことが求められます。

以上の問題意識をふまえて、データと実践の架橋を推進していくためには、大学毎にローカルレベルの調査を実施することが必要です。というのも入試の多様化や進学率の向上に伴い、一つの大学でも様々なタイプの学生が集まっているからです。

私どもの大学の場合は、IR*を重要なFD*ツールのひとつとして活用し、正課学習における学習成果を測定・分析しています。記名方式にするこことよって学内の教務系データ等と照合させ、大学が組織的に支援すべき学生群をより明確に

実態を、いかにデータで裏付けをしていくかという作業ではないでしょうか。調査紙によるデータ収集では、予め設定した指標でしか学生の成長は汲み取れません。調査紙の範囲に留まらない学生の多様な成長を実現する場を、大学はいかに作り上げていくのか。以上のテーマで今後も考えていきたいと思っています。

*IR=Institutional Research: 高等教育機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関内で行われるリサーチ

*FD=Faculty Development: 授業改革のための組織的な取り組みの一つで、大学教員の教育能力を高めるための実践的方法

環境視点を全く意識していなかったり、自己のキャリアだけを意識しすぎる傾向が強いという結果が出ています。充実した大学生活を送ったと自負している場合でも、実は同質的な集団の中にずっと身を置いていただけであったり、PDSを回す経験が欠落していたりすると就職後に苦労することもあります。

大学時代の経験が、適応・不適応を分ける重要な要因であることは明白ですが、問題はその中身、質なのだと思います。その中身、質の部分がきちんと組み込まれていけば、溝上先生、下村さんのロジックは一層強固なものになるのではないのでしょうか。

*PDSサイクル: 企業活動におけるマネジメント業務を円滑に進める手法の一つ。Plan(計画) Do(実行) See(振り返り)の3段階を繰り返すことで業務を継続的に改善するものだが、個人がある状況の中で無自覚的にこのサイクルを回すことで、質の高い学習が獲得されることがままある

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、報告を行った溝上・下村の両氏と、同報告へのコメントを行った浦坂・鳥居・豊田の3氏が壇上に並び、東京大学の中原氏がファシリテーターを務めました。

直前の参加者ダイアログの時間に会場参加者から寄せられたコメントシートの中から、数の多かった質問や鋭い意見を中原氏がピックアップ。会場全体を巻き込んで展開した議論は、密度の濃い内容となりました。

小・中・高とキャリア教育をあまりやっていなかったのに、大学に入學してから急にできますか？

溝上 キャリアデザインに限定すると、この質問には「できない」とお答えすべきだと思います。キャリアデザインとは将来を考える力と



も言い換えられ、この力が備わっている学生は、すでに入学時から自分を成長させようという態度で授業や自主学習に取り組みます。このような姿勢の学生を支える土台というのは、小・中・高の段階で作られているものです。その意味ではキャリア教育の基本、特にデザインの部分は大学入学以前だと言わざるをえません。

ただし、豊田さんのお話にもあったように、良い学生が良い職業人になるとは限りません。ですから大学ができることは、受け入れた学生に対して大学ができることを精一杯やり、基礎力を備えた良い学生を送り出す、そのことに尽きるように思います。

豊田 私も早期教育に異論はありません。しかし、一方でキャリア教育には危惧すべき

●パネリスト●

浦坂 純子
同志社大学 社会学部 教授

下村 英雄
独立行政法人 労働政策研究・研修機構 主任研究員

豊田 義博
株式会社 リクルート ワークス研究所 主幹研究員

鳥居 朋子
立命館大学 教育開発推進機構 教授

溝上 慎一
京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授

●ファシリテーター●

中原 淳
東京大学 大学総合教育研究センター 准教授



二面も見られます。例えば、短期間のインターンシップなどの表層的な体験だけで、仕事に分かったような気になってしまい、仮想的な有能感を抱いてしまう学生もいます。一例とはいえ、このような場を提供している現状に危機感を感じます。ただし、逆に言えば学生のこうした部分を早い段階でうまくケアしながら教育内容を設計していくのが、実践的な



キャリア教育のあり方ではないでしょうか。そもそも、「キャリア教育」という枠組をわざわざ設けなくても、通常の授業を先生がしっかりと進めていく中で、学生本人が試行錯誤を重ねるうちに必要な社会人基礎力は十分身につくと思います。

**対人志向・勉学志向の2つの軸と
偏差値や文系・理系との関係はあ
るのでしょうか。**

下村 調査の結果、理系文系との関係はあまり見られませんでした。一方で偏差値との関係は明らかです。これはあくまでもイメージですが、おおよそ次のような関連性が見られました。

- 〈有名私立大学〉対人志向・勉学志向ともに高く、第一志望の企業内定率が高い
- 〈国立公立大学〉勉学志向が高く、試験組が多い
- 〈中堅私立大学〉対人志向が高く、第一志望以外の企業内定率が高い
- 〈低偏差値大学〉対人志向・勉学志向共に低い

以上の結果に関して必ず聞かれるのは、「では、対人志向・勉学志向も低く、偏差値も低い大学の学生はどうなるのか」という問いです。



このような場合には、まずは勉学志向を目指すことを勧めます。現在の大学の授業は、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力など、学生の様々な能力を伸ばす工夫がなされています。勉学志向なら本人の意志だけで何とかなりますから、正課に真面目に取り組む過程で対人志向の能力を身につけていくことが近道なのではないでしょうか。

今回の議論では大学での経験と年収の関係を見ています。浦坂先生は労働経済学の立場から年収を規定する要因はどのようなものがあるとお考えですか。

浦坂 企業で長く働き続けるほど生産性が高まり、結果として賃金が上がるといふオーソ

ドックスな考え方に基づけば、企業での教育訓練が進んでいない初期キャリアの段階で、賃金に差がつくことは考えにくいですが。ただし一方で、即戦力を求めたり、成果を直ちに賃金に反映させる成果主義型の企業も増えてきています。このような場合には、大学での経験が何らかの形で働きぶりにつながり、賃金にも反映される可能性は考えられます。



IRは情報の分析として捉えられることが多いのですが、立命館大学ではデータをもとに学部ごとの対話を促しているというお話がありました。その際、どのような点に留意されているのでしょうか。

鳥居 私どもIRプロジェクトが行っているのは、「学生の学びの実態調査」の基礎集計や学内データとのクロス集計等が中心です。結



果の価値付けや断定的な解釈はしません。まずは基礎集計の結果を各学部でフィードバックして、学部内で次の分析方針を検討していただきます。そうした学部のニーズをお聞きした上で、改めて学内に蓄積されている各種データと照合して、再び各学部へフィードバックするという対話を地道に積み重ねています。

学びの形態はいろいろありますが、正課外の学習を担ったり、コントリールしたりするのは大学の責務なのでしょいか。大学教員はどこまで介入すべきなのでしょうか。

溝上 社会人基礎力に関しては授業内でも

十分に鍛えられます。ただし、将来のビジョンを育てることに限っては教員だけでは無理です。というより、そもそも教員だけでは、今日求められているような大学教育の成果は出せません。特に職員、そして外部の専門家も含めて大学関係者が一体となって、包括的に学生を支援していくことが大学教育の改革に必要なだと考えています。

「大学の必要性を感じられない」という意見がありました。そこで下村さんと豊田さんに質問です。お二人は現在大学に所属なさっていませんが、大学の必要性をどのように捉えていらっしゃいますか？

下村 大学生が就職活動の際に忘れがちなのが、同年代のフリーターの就職活動と比較すれば、自分たちはかなり恵まれた環境にあるということです。ですからキャリアセンターは

もちろん、大学を最大限に活用することは大前提です。確かに、何でも自分でバリバリできる若者であれば、大学は必要ないのかもしれない。しかし、そうでない若者には大人の支援が必要不可欠です。その支援の担い手として大学があるのです。大学が必要ないなどということは考えたことはありません。

豊田 私も全く同意見です。「隠れたカリキュラム」(＝hidden curriculum)を含めてキャンパス全体が彼らの生活空間だとすれば、そこで彼らが育つていることは間違いありません。大人への通過儀礼を果たす意味でも、充分意義はあると思います。

溝上 私が対人関係を考える上で重要視しているのが、2008年のフォーラムで東京学芸大学の浅野智彦先生がお話しされた、親密圏と公共圏を分けるという視点です。親密圏、つまり親しい友人間でのコミュニケーションというのは比較的誰でもできます。しかし、社会で求められるのは公共圏、公的な関係にある人や分野の異なる立場の人とのコミュニケーションです。その意味で、大学というのは、知を媒介にして対話を重ねていく、公共圏を提供する場として大きな役割を果たしているのではないのでしょうか。これが、教育機関でできる基礎力養成の基本的な構図だと思っています。

「大学生調査と教育実践との関係」を振り返る

東京大学 大学総合教育研究センター 准教授 中原 淳

本日の議論を踏まえた私の問題意識は次の3点です

- 1 目の前にいる大学生は、本当に我々が考える大学生なのか
- 2 知識以外の重要な能力を大学はいかに育んでいくのか
- 3 大学教育は卒業後のキャリアにおける責任と成果をどう規定するか

冒頭の溝上先生、下村さんの両報告を機に、一人の大学人として、これまで私自身が持っていた大学生論を相対化しつつ、データに基づく教育改革を行うことの重要性を感じました。ただし、単なるデータ分析に留まっていたは意味がありません。重要なのはデータ結果を可視化・分析した上で、いかに教育が問題に介入していくかという未来像を描くことです。

鳥居先生が提案されたIRのあり方は、データを元に各学部での解釈や対話する過程を大事にしています。現在は企業でもデータに基づく人材育成や組織開発が行われていますが、「公益」としての立場から、大学外での教育成果を考慮するIRのあり方というのは大学の特徴

ではないでしょうか。

私は企業で活躍する人材を育てるだけが大学の役割ではないと思っています。けれど学生や社会のニーズを考慮すれば、それを無視するわけにはいきません。この点を踏まえて、コミュニケーション能力や、将来の見通しなど、知識以外に大切な要素を育む教育を実践する際、その方法は大きく2つに分かれると思っています。

1つは正課教育と切り離す方法。もう1つは正課教育の中に、対人志向を身につけたり、将来の見通しを設計したりする作業を埋め込む方法です。後者に関しては、二人一人の教員にとってはイメージしやすいかもしれませんが、大学全体に広めていくというのはかなりの難問だと思います。

最後に、大学での学習経験と入社後のキャリアの関連性について述べたいと思います。研究者として非常に興味深いテーマである一方で、大学人としてこの問題を捉える際、我々は一体どこまでコミットする必要があるか、入社後の働きぶりのどこまでを大学教育の成果と判断すべきなのかという問題が生じます。

これに対して今後、大学は大学としてのあり方を自己規定していく必要があると思います。というのも大学のリソースが限られているにも関わらず、職業領域からの期待に答え続けていたら、放っておけばいつまでも大学の責任を指摘され続けます。

では、大学はどのように自己規定をすべきでしょうか。ここで「大学が持っている価値とは何か」という根源的な問いに直面することになります。この課題は、続く総括パネルディスカッションにバトンタッチしたいと思います。

最後になりますが、ご講演いただいたお二人の先生、コメントーターの皆様、議論にご参加いただいた皆様、心より感謝申し上げます。

上げます。



総括パネルディスカッション

「一日を振り返って」

総括パネルディスカッションでは、先のパネルディスカッションで提示された

「大学が持っている価値とは何か」という根源的な問いについて

3氏がそれぞれの立場から論点を提示。

今後の大学教育のあり方について議論が交わされました。

高等教育全体の視点から

東京大学 大学総合教育研究センター センター長/副学長 吉見 俊哉

- ① 「将来のビジョン」や「キャリアへの見通し」は所与なのか
- ② 大学は学生の「キャリアへの見通し」や、「実行理解」の姿勢を育てているのか
- ③ 大学は、「将来のキャリアビジョン」を学生と共に作るべきか



本日の議論から次なる議論を触発する回路作りのために、私からは改めて本日の議論における疑問点と課題を明確にする問いを大きく3点提起したいと思います。

溝上先生と下村さんからの報告では、いずれも一定の区分を設けて、学生のタイプがきれいに整理されていました。両報告で私が最も注目しているのは、溝上先生が提起された「キャリアへの見通

しと実行理解」という要素です。この視点が両報告で提示された学生タイプ、あるいは対人思考・勉学志向とそれぞれ交差することによって、新たな学びとキャリアの関係を考えていく可能性が示唆されるのではないかと感じました。では「将来のビジョン」を持つことや、「キャリアへの見通し」「実行理解」とは一体何を指した言葉なのでしょう。職業に合わせた職業教育を行うことが果たしてキャリア教育といえるのでしょうか。というのも、例えばライブラリアンやキュレーター、ジャーナリストなどは国家的に知的専門職として確立している職種ですが、日本ではそれらが確立しているとはとても言えません。つまり、日本社会では職業体系そのものに対する疑念がある。だとすれば、キャリアを所与として職業教育を行うのではな

く、キャリアの体系全体を含めたビジョンを考える必要があるのではないかと考えます。しかしながら、実際に大学は学生に対してこのようなビジョンを持ち、それに向けて理解・実行する姿勢を育てているのでしょうか。溝上先生の報告では、1年生でビジョンを持つている学生は4年生になっても持つているし、ビジョンのない学生はいつまでも変わらないという指摘がありました。これが事実だとすれば大学はビジョンを育てていないのではないかと疑念が生じます。大学はビジョンを育てるとは、具体的にどういう教育をしていくことなのかという問いに答えなければなりません。そして最後の問いは、キャリアを誰が定義するのかということです。一般的に社会の中ではキャリアがすでに所与の

●パネリスト●

川崎 友嗣
関西大学 社会学部 教授

松下 佳代
京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

吉見 俊哉
東京大学 大学総合教育研究センター
センター長/副学長

●司会●

大塚 雄作
京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授

学習論の視点から

京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代

- ① 学生が自己変革する過程を支援するのが大学教育の役割
- ② 社会を担う意識を持った学生を育てる必要性
- ③ 学生は大学の豊かなリソースを利用しつくすべき



和田先生の講演では、「教育は欲張りであつてよい」のだから、いろいろな努力目標を掲げることが必要だというお話がありました。溝上先生と下村さんの報告においても、「できる」学生を目指すという話から議論が進んで行きましたが、私はそうではない学生について、もう少し考えたいと思います。

例えば、溝上先生の報告で不応とみなされた6割の学生の中にも様々な学生の層があると考えられます。その中には大学が積極的に関わらなければならぬ学生もいれば、そうではない学生もいます。教育する側はどの学生

ものとして存在していると考えがちです。しかし変化の激しい流動的な社会にあつて、現在キャリアとして捉えられているものが、10年後も20年後も変わら

ないとは考えにくい。ならば、個人が将来のキャリアビジョンを考えると、これは、身近な社会だけでなく、それを包み括する世界そのものがどう変わるかと

いうことをも見据えたものでなければならぬはずで、このようなビジョンを学生と共に作っていく役割が大学にはあるのではないかと考えています。

まで関わっていくのか。大学2年の時に不応とみなされたとしても、その後の人生の中でいろんな挫折・失敗を経て、その壁を乗り越えるケースもあると思います。

大学4年間の中でも、色々な人と出会ったり、学んだりしながら挫折を経験して、そしてそこから自分自身を作り変えていく可能性ががあります。その過程をいかに支援していくかが大学教育の役割だと思えます。すなわち挑戦する機会を与えること、そして失敗した時に、それを乗り越える機会を作ることです。大学4年間の中で、挫折や葛藤を繰り返すような機会を与えられる大学生活を過ごさせたいと思つています。

それからもう一つ、個人と社会という軸を作ったときに、個人の人生の成功という視点だけではなく、大学を通して、社会をどう変えていくのかという視点も必要だと思えます。例えば、OECDのような経済活動に関する機関であっても、人間の能力を語る上で

2つの視点—(個人の) successful life と well-functioning society —を提示しています。同様の視点から鳥居先生が「公益」としての大学の役割を論じられていたように、大学が育てるべきは単なる労働者・納税者ではなく、今の社会を変えたいと思うような学生です。

大学のリソースには確かに限りがあるもの、それでもやはり非常に豊かだと思つています。私自身、7年間のオーバードクターを経て、教える側として大学に戻った時に、いかに大学がリソースに満ち溢れているかということを実感しました。しかし、今の大学生は本当にそれを利用してきていません。浦坂先生が著書に書かれているように、「大学の正課をしゃぶりつくす」くらいに利用できるものは利用しつくすべきです。例えば限られたリソースであっても、それを大学生が最大限に利用できるように仕向けるだけで、学生の成長は大きく変わるのではないかと考えています。

キャリア教育の視点から

関西大学 社会学部 教授 川崎 友嗣

- ① 社会的な適応性は個人の生活領域での活動と関連する
- ② 多様な学生に対する多様なアプローチが必要
- ③ キャリア教育は「学生と社会」、「学生の現在と将来」をつなぐもの



本日の議論を通して、高等教育はどこへ向かうのか、あるいは今後日本社会を担っていく人材をいかに育成していくのかという大きな問いが提起されたと思っております。

まず1点目に社会的な適応性に関するデータについて、溝上先生は学生タイプ3、4の学生が充実感が高く、下村さんからは対人志向・勉学志向のいずれも高いことがプラスにつながることを示されました。本日の報告は初期キャリアまでを調査したものでしたが、30代から50代程度までを調査した私の研究データでも、個人の生活領域で

社会的な活動を積極的に展開している人が適応的であるという傾向にあるようです。

一方、活動が十分ではなくて適応できていない学生に対しては、必要なもの身につけるためにどう働きかけていくかが問題です。高等教育においては対人志向、勉学志向、そしてビジョンが大切です。同時に、ビジョンを描くだけではなく、それを実行して、努力していくことも大切だと思います。しかし、これをすべての学生に求めるとなれば、非常に大きい問題があると思っています。

大学と学生の双方が多様化しているなら、働きかけるアプローチも多様化すべきです。しかし、今のキャリア教育においてそれが実現しているとは言い難く、すべての学生に対して「ビジョンを描こう」、「コミュニケーション能力や社会で求められる力をつけていきましょう」と画一的です。

コミュニケーションは苦手でも、勉学志向で勝負する方法もあります。このようにすべての面でバランスがとれている必要はないという考え方もあると思います。目指すものによつていろいろな進め方があるという共通のアプローチを示すならば、目的が多様性を持つてきます。いずれにしても「誰が何のために何を目指すのか」をより明確にしていく必要があると思います。

キャリア教育の重要な機能は、学生自身と社会をつなぐという面と、学生の現在と将来をつなぐという面の二つに集約できると私は考えています。この「つなぐ」という行為が人生と日常生活の乖離を減らすことになると思います。しかし、統合の仕方は必ずしもビジョンありきではなく、日常生活からビジョンが生まれることもあります。また、所与のビジョンに向かって努力するだけが唯一のアプローチではないとも思っています。両者をどうバランスをとり、現在と将来をつないでいくか、そのアプローチも個人の特性、タイプに合わせて考えていく必要があると思っています。

コミュニケーションは苦手でも、勉学志向で勝負する方法もあります。このようにすべての面でバランスがとれている必要はないという考え方もあると思います。目指すものによつていろいろな進め方があるという共通のアプローチを示すならば、目的が多様性を持つてきます。いずれにしても「誰が何のために何を目指すのか」をより明確にしていく必要があると思います。

コミュニケーションは苦手でも、勉学志向で勝負する方法もあります。このようにすべての面でバランスがとれている必要はないという考え方もあると思います。目指すものによつていろいろな進め方があるという共通のアプローチを示すならば、目的が多様性を持つてきます。いずれにしても「誰が何のために何を目指すのか」をより明確にしていく必要があると思います。

吉見 本日のフォーラムではずっと「ビジョンが大切」ということを議論してきたのですが、私自身の大学生活を振り返ると、当時はビジョンや将来のキャリアへの見通しもなく、ただ実

行するのみだったと思います。それに対して溝上先生は、当時と今の学生の実態は違っていると仰つていて、たぶんそれは正しいのだと思います。キャリアへの見通しを立て、実行理解につ

なげるには、未来のイメージが必要です。それなくして現在と未来はつながりません。私が学生だった60〜70年代は、日本社会の多くの人が幻想であれ未来像を持っていました。

パネルディスカッション



若者たちはその未来に反発したり、共感したりしながら自分の現在と未来を関係づけているのです。ところが、80年代のバブル期には現在のハッピーを永遠に続けたいために、未来も現在もなくなり、日本経済が落ち込んだ90年代末から2000年代になる頃には、次第に社会全体が未来を喪失しているという状況になってきます。このような状況にあつて、若者たちがいかに自分の未来を描くかという問題は非常に重要です。今の若者たちが良い形で

自分の未来を描くためには、社会全体の未来を描くことが必要で、そのために大学はやるべきことが十分にありと思っています。

川崎 吉見先生が仰るように、将来のビジョンを描く上で、社会全体の先が見込めるのかどうかは非常に大きいと思います。ただ、大学生が現在の自分を延長して将来につなげていく中で、例えばビジョンがなくても、現在の取り組みを様々

に展開していくことで、やがてビジョンを作りあげていくことは可能です。また、ビジョンとは一度作って終わりではなく、その都度変更や修正することもありうるものです。

そもそもビジョンは全ての人に常に必要なものではなく、「これから先の自分はどうすればいいのだろうか」と不安になったり挫折を経験した時こそが、将来のビジョンを描くきっかけになると思います。

松下 最初は夢物語としてキャリアを思い描く場合もあるかもしれませんが、しかし、次第に社会への理解を深めていく過程で社会での自分の位置付け、どのような社会にしていきたいかという観点から、自分のビジョンを組み替えていく方法もあります。その中で、それぞれが違ったところで自分の存在価値を見出し、いくことを考える必要があると思います。

吉見 松下先生には全く同感で、社会の理解を深める中で、自分のビジョン、あるいはキャリアへの見通しが変わっていく、この「変わっていく」ということがとても大切だと思います。それによってキャリアや人生、あるいは未来への多様な回路が開かれる、そういう場において大学がなり得るか。最初から決まっている軸をずっとサポートするよりは、多様性を開いていく回路がとても大切だと私は思います。

大塚 本日のフォーラムは調査結果を基に

様々な意見が交わされてきました。しかし今後の課題としては、鳥居先生も指摘されていたように、それをいかに大学活動の実践に活かすかということが重要になってきます。その際、受け身のままでは調査結果から得られるものは何もありません。やはり、大学を動かす側がいかに調査結果を解釈するかという対話の場を設けることが大切です。

ですから電通育英会の調査も、こうして何度もフォーラムの中でディスカッションできているということが次の調査につながりますし、一つのひな型になるのだと思います。

そして、ダイアログで色々な立場から様々な意見が出されることによつて知識のアウトソーシングが実現します。このような交流の場を設けることが大事ではないかと私は思います。

本日これほど多くの方にお集まりいただき、同じ場を共有できたことは今後に向けて非常に貴重な機会となりました。本当にありがとうございます。



併催「高校教諭のためのシンポジウム」

大学生研究フォーラムの翌日に開催された

『高校教諭のためのシンポジウム』。

「高校生の学びとキャリアを大学との接続で考える」をテーマとする本シンポジウムには、

全国各地から約250名の高校関係者が集いました。

第一部となる「討議」では、京都大学の溝上氏、

同志社大学の浦坂氏、東京大学の中原氏の3氏による、

前日の大学生研究フォーラムでの議論の紹介の後に、

会場の参加者を交えて活発な質疑応答が行われました。

ここではその質疑応答の様子をご紹介します。

第一部 討議

大学の立場から「高校にはこういうことをしてもらいたい」と思うことについてお聞かせください。

浦坂 私が所属する産業関係学科では、雇用や労働を扱います。雇用や労働は生活に密着していますので、その実態に触れる機会は多いはずなのですが、それらを含めて学生たちの世の中に対する関心がものすごく低い。そういう状態を解きほぐすには非常に



関心を世の中に向けさせて、様々な物事を自分の問題として考えられるような働きかけをしていただければ、と思います。

中原 まず基礎学力は絶対に必要です。それだけではなく、できるだけ早い内に「大学とは何か」「なぜ人間は働くのか」という青臭い問いを考えるきっかけを

時間がかかります。

ですから、高校の普段の

授業で扱う内容をできる

だけ現実と結びつけること

で、少しでも学生の視線と

パネリスト

浦坂 純子 (同志社大学 社会学部 教授)

中原 淳 (東京大学 大学総合教育研究センター 准教授)

溝上 慎一 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授)



持っていたきたいと思います。私の経験上、そういうことは先生が言ってもあまり伝わりません。学校の外に出て、普段は接する機会がないような異質な他者に会うことが有効です。ただ、会うだけでは考えは深まりませんので、事後にその経験をリフレクションする機会を持つことが非常に重要です。

溝上 キャリア教育で重要な要素は、「キャリアデザイン」「社会人基礎力」「社会性」の3つです。キャリア



アライザインと社会性は、キャリア教育と銘打ってじっくり取り組む必要があると思いますが、社会人基礎力については普段の授業に組み込むことが可能です。是非この部分を頑張っていたきたいと思います。

私の勤務校では「18歳での自立」を目指しています。その点、最近の大学は手をかけすぎている印象があるのですが、大学では学生を社会人として自立させるために、何を行っているのでしょうか。

溝上 私は、大学の本質とは、大きく言えば「学びと成長」だと思います。しかし、成長の指標は何も知識の獲得だけではなく、知識を活用していく基礎力でもありますし、就業力だけではなく、一市民として力強く生きていく力や生涯学習を行っていく学習者を育てることもあります。つまり、大学の教育使命は1つや2つに限られるものではないということです。

「自立」は、そうした多くの使命の基礎になる部分だと思えます。ただ、高校と違って大学では、学生をつぶさに見られる場はゼミだけです。学生の自立は結果的に目指すものではありませんが、大学としてそのことだけを目指したプログラムはないと思います。

浦坂 東大や京大と比較すれば、同志社が最も手を

かけているのは間違いないでしょう。「提出物は丁寧に扱いなさい」「文献はどの程度読みましたか」というようなことまで、心底情けない思いをしながらも、目の前の現実を見ると口を出さざるをえないというのが正直なところではあります。

本来は大学で指導するようなことではありませぬ。しかし、そういうことを根気強く繰り返すうちに、信じられないくらい成長する学生もいます。ですから、少なくとも私の目の届く範囲の学生については、「これでもう大丈夫、きつとやっつけていける」と思えるところまで求め続けて卒業させよう、という気持ちでやっています。



中原 東大は研究大学です。最先端の研究を生み出す中で教育を行うことを考えます。おそらく、全学生に提供する生徒指導を考えると、ここから独立して存在することはないと思います。

私自身の例で言いますと、私の研究室では産学連携の研究に活発に取り組んでいます。産学連携で外部機関と共同研究をするような場合にも、行政や企業の方とのお付き合いがありますので、清潔感のある身だしなみや、名刺の渡し方、挨拶の仕方などについて指導しています。ただし、これは私が個人として指導していることで、全学の方針ではありません。

「良い学生」と「ダメな学生」の区別について教えてください。また、東大や京大は日本だけでなく世界をリードする人材を育成すべきだと思っておりますが、いかがでしょうか。

溝上 高校や大学受験で得た知識、あるいはその段階での頭の良さというのは、大学入学後の学びからすればほんの基礎中の基礎です。そこをスタートに、新しい時代や社会の姿に適切に、自分で問題意識を持って頑張っていく姿勢こそが大学で学ぶべきことです。大学から与えられる課題や単位を取ることしか意識がないようではダメです。入学後に「大学の学び」をしっかりとできるかどうか、それが「良い学生」と「ダメな学生」の差です。この意味では京大の学生でも「ダメな学生」は半数以上いることになりました。

中原 社会を成り立たせるためには、既存の企業や組織で働ける人材が必要です。その一方で、社会そのものを変革していく主体も必要です。この相反する2つの主体を1つのカリキュラムで同時に育成しなければならぬところに、大学教育の難しさがあります。

東大では後者を指す学生が圧倒的です。私見ですが、大学としては職業準備機関になつてしまうことを最も恐れているのではないのでしょうか。それは「大学とは何か？」という大学のアイデンティティの問題と密接に関わっていると思います。

第2部

高校現場からの報告

「高校現場からの報告」では、高校生のキャリア教育をテーマに2校の事例報告と、報告に対する質疑応答が行われました。また、当初の予定にはなかったものの、宮城県気仙沼高等学校の佐藤先生から緊急アピールとして、東日本大震災で被災した地域のこれらからお話していただきました。

緊急アピール

宮城県気仙沼高等学校 佐藤 忠司

気仙沼高校の授業が再開したのは5月9日です。しかし現在(9月14日時点)も学校は一般避難所になっており、まだ約21名の方が生活しています。震災を機にこれまでの価値観は一変しました。ただ



し、こうした状況の中で人の温かさや困難を分かち合う心、色々な人から支えられているという絆、そういったことを強く感じています。

今回の震災に限らず、高校で進路指導を担当する人間として、生徒に「君たち若者たちが何とかこの状況を打開しなければいけない」と話しますが、生徒に「そう言っても仕事をする場所がない」と返されて答えるに窮します。元来、気仙沼は漁業を産業とする過疎地域の地方都市でした。それが震災でさらに崩壊してしまつたのです。

とはいえ地域の活性化、生業の復興なくしてはこの震災は乗り越えられないと思いますし、それを乗り越えようとする若者の一歩を支え、将来的には地域を担っていくような人間に育てることを肝に銘じてやっていきたいと思っています。

気仙沼高校には、多様な進路を希望する色々な生



徒がいます。東大に進学する生徒もいますし、就職する生徒もいます。多様性があるから面白い、ということを追求していこうと考えています。

復興までは長い年月がかかると思います。しかし、東北人には転んでもただでは起きない強さと粘り強さがあります。私達を支えてくれる全国の人達に感謝をしながら、頑張っていきたいと思っています。

生徒の成長の契機とキャリア教育のありかた

岡山県立勝山高等学校 教頭 三浦隆志

私がキャリア教育について深く考えるようになった

下がりて老いていく、という人生観が多く、どちらも思わず「うーん」と唸ってしまうような結果でした。

これはやはり教師が、どうにかして生徒の目を社会に向けさせて「社会力」を育まなければならないと強く感じました。

日本・イギリス・韓国の高校生が現代社会における難解な課題についてプレゼンテーションを行うイベントにも参加しています。

岡山操山高校は進学校ですが、単に受験学力をつけるだけではなく、これらの取り組みを通じて、自身

契機は、今年3月まで勤務していた岡山県立岡山操山高校において、1年生の現代社会の授業で、「自分の一生のキャリアを予想してみよう」という活動でのことでした。すでに7〜8年前のことです。

その中で多く見られたのが、例えば高校1年の女子生徒が考える「生とは、良いことと悪いことの繰り返しや、次第に旦那とうまくいかなくなるなど、妙に大人びたものでした。男子生徒の場合は、大学に合格して、就職をして、仕事を辞めたら右肩



「考えること」と「感じること」 被災地からのメッセージ

岩手県花巻東高等学校 教頭 村上育朗

東日本大震災が発生した3月11日、私は前任校の岩手県・大船渡高校に勤務していました。陸前高田市の自宅は津波で流されてしまい、今も避難所に在籍して被災者の支援を続けています(8月2日時点)。

避難所でもボランティアでも、高校生たちは本当によく活躍してくれました。それに対して大人たちは無力でした。大人たちは想定外の出来事にマニュアルが機能せず、パニックに陥ってしまった。そうしたことは、今回の経験がなければ分からなかったことです。

さて、今までの教育

そこで、各校で取り組みが始まった「総合的な学習の時間」を使って、体系的な指導の流れを整え、全校的なプロジェクトを開始しました。これは「一般教科とは異なる活動の中で、現在の社会の運営に積極的に関わること」によって、生徒に「社会をより良くしていく」とする意欲や、「その実現のためのアイデアを構想し、実行していく能力」を身につかせようというものです。

具体的には、コミュニケーション能力を高めるための弁論やディベート、グループワークでの大学の学部・学科研究がそれにあたります。例えば、倉吉東高校が主催する国際高校生フォーラムという、

は「覚える・覚えさせる」ことが中心でした。私は、これは養殖人間を育てる教育だとずっと言ってきました。なるべく苦勞や苦痛を生徒に与えないようにして、勉強の意欲がなければ細かい手立てを用意するというやり方は、まるで生け簀の中の魚が食べやすいように餌の配合を工夫しているようなものです。その結果どうなるか。網が破れても外に出ない養殖魚のような人間が育ちます。我々はマニュアルを作って分かりやすい授業をすることで、生徒たちの「生きる力」をわざわざ削いでいたのではないのでしょうか。

教育は、「考える・考えさせる」ことが中心でなければならぬと思います。人間の脳は動くものを追いかけるようにできています。最初から全てを教えずに、脳は動きません。ですから私は、授業では「なぜそう思うのか？」と生徒に問いかけるスタイルをとっています。

の将来に対する内的な動機づけを養っています。当然ながら、普段の教科でもそうした力は形成されているはずですが。

その成果として、単に自分の成績や模試の判定だけを見て進学先を決めるような生徒が減り、進路選択時に設定した目標を実現しようとする強い意志を持った生徒が育つようになってきました。

今後の展望としては、高等学校におけるキャリア教育が「過性のイベントにならないように体系化すること、普段の教科授業と総合的な学習の時間との有機的な連携、そしてキャリア教育指導とその評価の一体化、というところが課題になるのではないかと考えています。

そしてさらに、その先の教育は「感じる・感じさせる」ものであるべきだと思います。疑似体験ではなく、真の体験を、成功体験だけではなく、苦痛や失敗を経験してこそ本物になると思います。真の自由は不自由の中になければ分かりませんし、偽物を見分けるには本物を知らなければなりません。

他人の痛みは考えても分かりません。これからは他人の痛みを感じられる人間の育成が、教育の核心だと思っています。

私にとって、キャリア教育とは「凡事徹底」できる人間を育てることです。挨拶、服装、清掃がきちんとできる、つまりは一人前の人間にすることです。気品ある青春を過ごすことが品格ある人間の育成につながる。それが私の結論です。私たち教員の目の前にいるのは、生徒ではなく、未来です。是非、生徒を信じてやってください。それが未来を信じることにつながるのですから。

第2部

パネルディスカッション(要旨)

「高校における学業・キャリア形成と大学への架橋」

パネルディスカッションでは株式会社学研教育みらいの大堀氏を司会に、高校現場からの報告を行った三浦先生と村上先生、

そして滋賀県立膳所高校で進路指導主事を務める奥村先生、

埼玉県立総合教育センターの鈴木氏の4名が、

高校におけるキャリア教育の現状とこれからについて議論を交わしました。

最後に京都大学の溝上氏から、本パネルディスカッションを踏まえた全体の総括、

そして今後のキャリア教育と高大連携についてコメントが寄せられ、

2日間のプログラムが締め括られました。



大堀 本パネルディスカッションでは、

高校におけるキャリア教育がどのような形で展開されているのか、また、大学と高校の接続の中で、キャリア

担任の先生や授業の担当者、進路指導課が学年集会の中で生徒に話をするとき、「勉強だけしか見えない小さい人間になるな」と言います。それに加えて、私は「世の中のまやかしゃや幻想に気づいて、それを拒否する力を自分で育ててほしい」と話しています。



奥村 進路指導に携わって6年目になります。膳所高校の進路指導の根幹は、進路指導課だけでなく全教職員が携わるところにあります。です

から中心となっているのは日々の授業とクラブ活動です。

それから、私は生徒には色々な方面から、様々な方たちの話を聞いて欲しいと思っていますので、進路指導課では沢山の講演会を開催しています。

高校におけるキャリア教育とは一体どの範囲を指すのか、ということ考えた時、学習指導を脇に置く」とすると、残りのすべてがキャリア教育だと言っている

パネリスト

- 奥村 弘史(滋賀県立膳所高等学校 進路指導主事)
- 鈴木 徹也(埼玉県立総合教育センター 教育主幹兼主任指導主事)
- 三浦 隆志(岡山県立勝山高等学校 教頭)
- 村上 育朗(岩手県 花巻東高等学校 教頭)
- 溝上 慎一(京都大学 高等教育研究開発推進センター 准教授)
- 司会: 大堀 精一(株式会社 学研教育みらい)



鈴木 埼玉県のキャリア教育の現状は、県教委の指針の下、一定の方向性を持って進展してきましたが、個々の学校の実情を見ると、学校独

と関係するからです。なせなら、すべての活動は生徒の将来に生きてはいけない」「自立した人間になりなさい」ということを中心に生徒に話をするようにしています。



自の取組工夫にゆだねられたところが多く、埼玉県立総合教育センターが実施する研修でも、キャリア教育への発展はこれからというところです。

そういう状況の中で、高校ではあらゆる機会を活用して、勤労観や職業観等において、望ましい人間としてのあり方について指導することが必要です。学習指導の中でも、生徒の適性や興味・関心等を把握して、それらを伸ばすことをキャリア教育に結びつけていくべきだと思います。

また、キャリア教育によって生徒をどう育てるかという問題とともに、教員もどう生きるかを生徒と共に考えていくことが必要ではないかと考えています。



三浦 ある大手企業の方と話を
して、これからの大人社会は、
次の4つの類型に分かれると指摘
を受けたことがあります。

1. 教員やサラリーマンのような従来型の大人
2. グローバルな世界で活躍する人材
3. 医師などの専門職
4. 公務員

では高校ではどういう人材を育てるのか、皆さんと議論をして自分の活動に生かしていきたいと思えます。そのためには、生徒たちがどのような成長履歴を持っているか知ることが、生徒たちのキャリアデザインをサポートする上で重要ではないかと考えています。例えば、私は最近、「中学校の授業を見に行こう」

論者です。教員を連れて近隣の中学校に授業参観に行く。すると、高校の生徒達が受けてきている教育については、知らないことが沢山あることを発見します。知らないことがあるのなら知るべきですし、それが生徒を指導する教員の務めだと思います。こうした行動を通じて生徒たちのキャリアを、間接的ではあるとしてもサポートしていけるのではないかと考えています。



村上 私が良いと思う人生と、他の人が思う良い人生は違います。皆違っていると思う。高校に240人の生徒がいれば、240通りの生き方があっていい。しかし、それらの中から成功モデルのスタンダードを作って、最大公約数にまとめようとするのは無理があります。私たちは偏差値の中で生きていくわけではありません。それは大学に入るための学力であって、生きる力ではありません。

私は若い先生たちに生徒と同じ立場になるなど言います。やはり教師は教師の部分がないとだめだと思います。ところが今は、教師が生徒と友達のような感覚になってしまふ。昔は、すごく変わつてはいるけれども二目置かれていて、生徒に「あの人はすごい」と思われる先生がいました。

今は生徒に媚びている先生が多いように思います。それは先生自身が自分の生き方に自信がないこと、表れではないでしょうか。



溝上 教育現場で学生を「人前」にさせようとしても、「一人前」とは一体何を指すのか、ということを引きと示さなければ、それを実践していく教員たちの共通認識は得られません。

高校では全人格的な指導がなされていて、そこが大学とは決定的に異なるところだという認識もしているのですが、とはいえ「教科指導以外は全部キャリア教育」としてしまつと、何がキャリア教育なのか分からなくなってしまう。

キャリア教育とは、高校でも大学でも、①キャリアデザイン ②社会人基礎力 ③社会性に関する取り組みです。この定義・観点に従つた上で、「ではこの高校の取り組みはどうだろうか」と見ていく必要があります。私が見ている高校（進学校）に話を限定します。では、キャリアデザインについては、進路指導としてのオープンキャンパス参加、大学教員の出前授業、希望大学・学部への学習などで結構なされているという印象を持ちます。

逆に、受験に対するプレッシャーがあることを分かつた上で申し上げるのですが、進学校では総合的な学習の時間がおざなりにされているという印象もあります。これは社会人基礎力（教科教育では知識活用能力と言ふべきでしょう）の育成を怠っているとも言えます。京大生を見ていると、高校時代にディスカッションやプレゼンテーションの経験が少ない者ばかりいますので、そうしたことを皆さんにご認識いただければと思います。